

文語日誌（平成二十七年三月十日）

白山通りは水道橋驛のほど近く、國文學専門古書肆「日本書房」は、文語を愛する者にとりて、寶の山とこそいふべけれ。とりわけ、道路脇軒下ワゴンに積む端本の魅力は格別なり。保存状態は必ずしも良からざるに、一冊百圓より五百圓程度なれば、掘り出し物に出逢ひたる時の歡びは忘れ難し。

最近の收穫品の一端を列擧せば、以下の如し。

一 「四書五經 増補文選字引」

弘化四丁未年孟春稿成、明治十四年の印刷なり。編輯人故人山崎久作、出版人東京府平民山中市兵衛。東京書肆甘泉堂藏。此の辭書を手にしつつ四書五經、文選を眞劍に勉強せる昔の學生を思ひ、感慨又深し。

二 「日本外史纂語字解 卷一より卷四まで」

京都府士族鈴木音彦編纂、三書堂藏版、明治二十三年出版、二十五年再版。

日本外史のうち其の解し難き字句に音訓註釋を施し童蒙に補益する所あらんとしたるものなり。

三 「普通教育 女子記事文」

久保田蓬庵先生著、浪華教育書房、明治三十一年刊。

「年始の文」の例文より…『曆の改りぬる御よろこび幾久しく申しをさめまゐらせ候ますます御機嫌よく御齡を重ねさせられ目出たく存じ候妾方も無事に年を加へ候間憚りながら御心安く思しめし下さるべく候先（まづ）は年の始の御ことぶき申し上たく拙き文をささげまゐらせ候かしこ』

四 「新編 倫理教科書 首卷」

文學博士井上哲次郎、文學士高山林次郎共著、東京金港堂書籍、明治三十年刊。定價金貳拾五錢也。

緒言に曰く…『學問の進歩に伴ひ、諸般の物質的教育次第に繁雜を加ふるに至れり。此時に當りて精神を高尚なる境界に導き、人物を暗々裏に鍛鑄するの方針を取るにあらざれば、將來の國民は如何に卑俗に走り、下劣に趨くやを豫期するを得ず。是れ倫理科の教育上に於て殊に重要な地位を占むる所以なり。』

五 「新撰帝國史要 上下」

文學士芳賀矢一著、明治三十一年刊。中等教科用に供する目的を以て國史の綱要を記す。

六 「聖徳餘光」、「列聖珠藻」

發行者は紀元二千六百年奉祝會、印刷は内閣印刷局、非賣品。

二冊セットにて帙入りの和綴本なり。

前者は辻善之助教授著にて、歴代天皇のエピソード、漢詩等を収む。辻教授の記憶によるに、明治天皇は、明治三十二年より崩御の年まで、東京帝國大學卒業式には殆ど缺かさず御臨幸。玉座の用意ありても御起立のまま微動だにせさせ給はざりき、とぞ。

後者は歴代天皇の御製を集めたるものにて、編者は佐々木信綱なり。

(平成二十七年八月二十五日受附)